

『痛み』

作者 浅羽一

手術を始めます。

映画やドラマなんかで聞けそうな台詞が頭の中で流れてきて、思わず状況も忘れて苦笑しそうになった。笑っていられる場面では決してないはずなのに。

左手の指で探りながら位置を決め、ナイフの先端を皮膚に押し当てる。そして一気に真横に引いた。

指先に温かなぬめりが触れ、臍のすぐ下の皮膚に細長い筋が出来た。

もう一度、ナイフをぱんぱんに膨らんだ腹に当てた。今度はさらに強く刃を突き立て、けれど先ほどよりも遙かに慎重かつ丁寧に、切り裂く。かすかに何かがちぎれるような音がする中、今度こそ腹膜まで完全に切り開く事が出来た。もしも今、真上から写真を撮ってみれば、現像される写真には笑っている口みたいな画像が現れるのかも知れない。

躊躇無く腹の中に手を突っ込む。女性の膣の中に無理矢理に手を入れれば似た感覚を味わえるのだろうか、熱いとさえ思えるほどの体内、もの凄く柔らかいのに弾力のある感触を指が捉えた。さらに手の平でそれを包み込むと、それは僅かに、だけど確かに身じろぎをした。思わず腕全体に鳥肌が立った。これが命かと、そこでようやく実感した。

瓦礫同士が互いに支え合っているかのごとく、作り上げられているととても狭い空間。光は、頭上、手を伸ばせば届くほどの所に開いた、長さ三十センチほどの楕円形の穴とでも言うべき隙間から差し込む程度。外からなだれ込んでいた雑音は、もうすでに聞こえなくなっている。聞く気もなかった。

足は、膝の辺りで瓦礫の下敷きになっっているのか、左右共に動かなかった。それならばいっそ切断されてくれていれば良かったのにも思ったが、だとすればそもそも出血多量でとくに死亡しているだろうから、やはりそれは不幸中の幸いなだろう。それに、仮に身動きが取れていた所で、この棺桶さながらの場所から逃げ出せるはずもなかったのだし。伸ばした手をどちらへ向けても、硬く冷たいコンクリートの存在を確かめられそうに限定された空間で自由になるものは、両手と、首から上、本当にそれくらいで、それらを使って自由に出来るものだって、突然の地震の際にも手放すことなく胸に抱えていた小さなバッグと、その中に入っていた小物くらいだ。優しくない床に頭を寝かせて、そのまま真っ直ぐに前を向けば見える、いびつに縁取られた小さな空は、青く、何となく暗い部屋で引きこもり続けている人間が、ふとそこで唯一の扉の鍵穴から外を覗いている風な光景を連想させてきた。時折、中を探ろうとする人間の目が、無遠慮に光を遮ってくれる所も含めて。

と、また空が塞がれたから、それを機に止めていた「手術」を再開した。医学に関する知識なんてほとんど無かったし、あった所でろくに見えもしない場所を、しかも体を固定されたも同然の体勢のまま、安物のナイフ一本で自ら切り開くなんて事、まともな思考の持ち主であったならばほぼ間違いないだろうけれど、これもまた不幸中の幸いと言えるのか、私は身体的にも、そして最早、精神的にも正常でなかった。

無痛覚症のくせに自傷癖持ちの妊婦。それが私を説明する上で、最も簡単で、同時に外す事の出来ない表現だった。

素晴らしい、何と虚無的な人間なのだろう、また何と皮肉な話なのだろう。痛みを感じる事が出来ないのに、もう十分にそれを理解しているはずなのに、それでも尚、しつこく「痛み」を求めて自らの体を傷つけては、その度に己の異常さばかりを再確認してしまう。

そうしてさらに心は病み、徐々に酷くなっている傷痕があらゆる所に増えていく。日常を奪われ、正常でなくなっているから、もうじき十ヶ月。その間に刻まれた傷の数も、抉った皮膚と肉の量も、流れた血液の重さも、まるで覚えていないけれど、自らが壊れた瞬間の事だけは忘れたくとも忘れられなかった。

ごくごく普通の大学生として、ごくごく普通に夕方までサークル活動をし、ごくごく普通に電車を乗り継いで地元に戻り、ごくごく普通に日の暮れた道を足早に歩いていった私は、突如として現れた数人の若い男達によって強制的にミニバンの車中へと引きずり込まれ、全身を乱暴に押さえ込まれたまま何処か知らない場所へと拉致された。助けを求めて叫ぼうとする度に、頬を殴られ、四回ほど繰り返された後にはもう、喉は嗚咽しか生み出せなくなっていた。

着いた先は、何やら林の中にある、廃墟じみた汚いプレハブ小屋だった。申し訳程度の明かりを生んでいる裸電球が吊された下には、せんべい布団が一枚、敷かれていると言うよりも、ただ落ちて広がっていた。

カバンを漁り、財布から免許証や金を抜き、さらには携帯電話の番号などを盗む様を、男達は私の服を破り、むしり取りながら、見せつけてきた。止めて欲しいと、許して下さいと懇願させたいのか、奴らはまばたきの為を目をつぶる事さえ許そうとしなかった。下品な笑いに顔を醜く歪めながら、何よりもまず私の視界を犯してきた。顔を隠そうとする卑屈さなんて皆無だった。

やがて裸に剥かれた私の前で、おぞましい下半身をさらけ出した男が、からかいめいた口調で言った。「痛いのは最初だけだつて」と。それを聞いた他の男達は口々に下劣な言葉を吐き出していった。目に続き、私は耳を犯された。男達が耳の穴から脳の奥へと入り込んできて、思わず嘔吐しそうになった。けれど「吐いたら殺す」と脅されて、結局、私は奴らのなすがままにされた。

果たして、それは皮肉か、それとも悲劇か、確かに男の言った通り、「痛い」のは最初の一人だけだった。何の下準備もいたわりもなく、ただただ無理矢理に男が私の中へと押し入ってきた時、本気で体をろくに削られてさえない木槍で貫かれたと思った。絶望と激痛のせいで、いつそ殺してくれと心から願った。泣き声と悲鳴を交互に上げながら、それに「こいつ興奮してるぜ」とふざけた揶揄を返されながら、間断なく襲い来る痛苦に、このままでは脳みその神経が焼き切れると確信した。そして、それならば一刻も早くそうなってくれと思った。それから、しばらくして、最初の男が「俺、処女に中出したのつて、初めてかも」と嘲弄する言葉を発しながら離れていった頃にはもう、切望した通り、私の体は何も感じなくなっていた。その後、代わる代わる男達が血に濡れた私の中を出たり入ったり繰り返していたけれど、やはり何も感じなかった。初めの方こそそんな廃人さながらの態度を面白がっていた男達も、次第に苛立ちを見せ始め、しかし終いには呆れたのか、それとも単に飽きたのか、奴らはひとしきり欲望を吐き出した後、おもむろに服を着てから私をそのまま車へと連れ戻し、やがて元いた場所へと戻ってくると、ほとんど車を停めることなく私をドアから放り出した。まるで足が取れて遊べなくなった人形を捨てるみたいに、微塵の躊躇もない行動だった。

次に気付いた時、そこは病院のベッドの上で、傍らで母が泣いていた。体中に包帯が巻かれていて、さらには点滴の針も腕に刺さっていて、きつとももの凄く痛いはずだったのに、

私の体は些細な痛みさえ感じていなかった。それどころか「痛み」というものがどんなものであったのか、思い出す事さえ出来なくなっていた。担当の医師から無痛覚症だと言われた時も、やはり同じで、私はもう己の心の痛みさえ自覚する事が出来なかった。

妊娠している事が分かったのは、それから少し経ってからだった。あの中の誰が父親なのか、正確には判然としなかったが、あの中の誰が父親であつてもおかしくなく、またあの中の子が父親である事だけは間違いなかった。

勿論と言つていいのだろうか、両親は中絶手術をするように言つてきた。医師もそれが良いと言つてきた。私はそれらを断つた。

酷い話かも知れないが、自身に宿つた生命に対する愛情なんて皆無だった。それどころか、あの連中の自身に寄生されていると思うと、それだけで今も尚、犯し続けられている気分になった。だが、それでも私は子供を捨てなかった。正直に告白しよう、道連れにしたかったのだ。何処の誰かも分からない男達に、直接に復讐をする機会が得られないとすれば、せめて、間違いなく不幸な身の上で生まれてくる子供に、代わりに苦しみを味わわせてやりたいと思つた。歪んでいる事は承知の上だった。これもまた不幸中の幸いと言えたのかどうか、どうせ出産の痛みも自分には関係ない話だった。警察は、男達を捜しているらしかったが、一向に犯人逮捕の報せは来なかった。

そうして私は「無痛覚症のくせに自傷癖持ちの妊婦」となつたのだ。常に持ち歩いてるナイフは、自らを傷つける為の物だったけれど、同時にいつでもあの男達を見つけた時には刺し殺せるようにと言う決意の証でもあつた。今度こそ、殴られようとも、蹴られようとも、奴らを皆殺しにしてやるのだと誓つていた。非力な女と侮る無かれ、完全に痛覚の壊れた私は真の人形さながらに、体の限界まで力を使う事が出来るのだ。分厚いコンクリートの塊を持ち上げる事は叶わずとも、男の腕の肉に爪を食い込ませ、降り注ぐ拳も無視して喉笛を噛み千切るくらいならば可能なのだ。

だけど、それなのに、まさか、自分がそのナイフを他の誰でもない己の体に巣くう胎児を救う為に使う事になるなんて。まるで予期していなかった。

出産を間近に控え、産婦人科の検診からの帰り道、ふと近所のデパートに寄つた。見知らぬ他人と密室で一緒になるエレベーターに乗るのは嫌で、かといつて窮屈なエスカレーターで上階まで行く気にもなれず、仕方なく一階の隅にある焼きたてパンが評判の喫茶店で一息吐こうとしていた、その直後だった。何の前触れもなく、いきなり建物が大きく揺れ、辺りでテーブルや椅子が仮初めの命でも与えられたみたいに跳ね回つた。ただ、反射的に腹を抱えてその場にうずくまつた私の頭に、二度ほど椅子の脚がぶつかったくらいで、その時はじきに地震は収まつた……のだが、問題は慌てて外へ逃げだそうと入り口へと向かつていた、まさにその瞬間に起こつた。

今度こそ、立っているどころか、まともにもうずくまる事さえ出来ないくらいに、激しい揺れが建物全体に襲いかかつてきた。重力の法則が出鱈目に変動しているみたいに、どちらが上でどちらが下なのかさえ曖昧になるほど軽々と、大の大人が地面の上を転がって行く。硬いコンクリート製の壁や床に容赦なく叩きつけられる少女、少なからず離れた場所にあつたはずのベンチが意思でも持ったかのごとく飛んできて頭部を強打される男性、一緒に逃げようと手を繋いでいた母親と共に弾き飛ばされてその下敷きになる子供、そしてそんな阿鼻叫喚の結末は、天井や周囲の壁の崩落という最悪の大惨事だった。

私が何とか生き残れた、いや、単に「死ななかった」のは、本当に些末な偶然が重なった結果だったのだろう。しかし、それもそう遠くない内に無に帰す事は明白だった。どれほどの時が経過した頃か、実はそれほど長くなかったのかも知れないが、頭上に開いた穴の向こうから、何とか無事だった人間達と現場に駆けつけてくれた救急隊員のやりとりらしきものが届いてきた。主要道路で陥没している場所もあり、倒壊した瓦礫を撤去出来る装備を調べた人員が到着するまでにはかなりの時間を要するだろうと言う話だった。そして私の周囲は、勇敢な人々の尽力によって何とか出来そうな程度のものでは決してなかった。所詮、人力は重機に敵わない。その証拠に、ありがたい事に私を発見してくれた人は、けれど即座に助ける事を諦めたらしく、「大丈夫だ、きつと助かるから」と、穴から覗いたり手を差し伸ばしてくれたりと励ましこそしてくれたものの、その声はあまりにも悲愴な雰囲気のもので、私は手を握り返したりすることなく「私は大丈夫ですから、他の人を助けて上げて下さい」と応える事しかできなかった。

ぼんやりと、死ぬのだと理解した。それも良いだろうと、結論はすんなり浮かんできた。どうせ続けていたって仕方ない汚された人生だ。自らの手で終えてしまうのは、あの連中に負けた気がして絶対に嫌だったから、自分を傷つける事があったとしても、一線を越えてしまう事はなかったけれど。こんな状況で全てが終わるのであれば、それはそれで詮無き事だろうと思った。

私は、恐れるどころかむしろ安らかな気持ちで目を閉じ、両手を組んで腹の上に置いた。痛みを感じられない体だ、おそらく両足からの出血もあるだろうし、このまま眠るように死ぬのだろうかと思っただけだ。最後に一度くらい母の声を聞いてみたい気もしたけれど、携帯電話は通話不能の状態だった。

だが、その直後、腹に載せた手に伝わる振動があった。それはかすかなものであったはずなのに、いつそ地震よりもさらに激しく私を揺さぶってきた。

単なる復讐の為の道具のはずだった。愛情を抱いた記憶なんて一秒たりとも無かったはずだし、それどころか憎悪の対象でさえあつたはずだ。それなのに、そのはずだったのに、その瞬間、どうしてなのか私は無性にその子を助けたいと思っただけだ。どれだけ恨んでも恨み足りず、どれほど呪っても気持ちちは晴れず、叶うのであれば一人ずつ全員をハンマーか何かで撲殺してやりたいと本気で願えるほどに憎い連中の子供であるはずなのに。私は急に、我が子を助けてやりたいと、せめてこの子だけでも生かしてやりたいと、そう思っただけだ。

決断は早かった。まさかそんな場面でバッグの中のナイフを使うとは、ほんの刹那さえ考えた事など無かった。まさか麻酔の要らない体に感謝する日が来るなんて、一度として頭に浮かべた事も無かった。無痛覚症のくせに自傷癖を持っているなんていう、きわめて無意味な存在価値しか持ち得ていない自分でも、価値あるものを産み出せるだなんて夢の中ですら理想した事は無かった。「何をするんだ」と驚愕しているらしい声が届き、焦った顔が空を塞いできたが、全て無視した。すでに破瓜の為された鼓膜と網膜にとって、それはいとも容易い事だった。

血と脂で切れ味の鈍ったナイフを、それでも懸命に使って、私は自らの内部をひたすら裂いていく。それがどんな名称を持つ臓器で、どんな役割を果たしているものなのか、知っている必要など無かった。要は、赤ん坊が取り出せるようになるまで間にあるもの全て

を切り開いていけばいいのだから。それに、自分の体を切るのには慣れていた。痛みはやはりまるで感じなかった。

そうして、遂に、私の指は直接、命に触れたのだ。血なのか、羊水なのか、それとも他の何かなのか、まるで分からなかったけれど、そこに浸かっていた生命は、とても小さく儂げなものであったものの、確かに人の形をしていて、間違いない私の赤ちゃんだった。

私はいつしか涙を溢れさせながら、丁寧にその子を取り出した。感動のせいかな、それとも別の理由からか、震える手で持ち上げた我が子は、まだ私と繋がっていて、それは本当に美しいと思える姿をしていた。無機的な背景も、傷だらけになってぺしゃんこになった腹の残骸も、その素晴らしさを削ぐ要素には成り得なかった。同じく、その光景を目の当たりにしていたのだらう、瓦礫の向こうから悲鳴とも歓喜の叫びともつかない声が聞こえてきた。私はそれを聞きながら、気を抜けば今にも落ちてしまいたいそうになる腕に最後の力を込めて、その子を再び腹の上に乗せて、臍の緒を切った。

数秒ほどの間を空けて、甲高い産声が狭い空間に響き渡った。それは単純に明るく可愛らしい泣き声などでなく、真っ赤な顔をして、顔中に皺を寄せて、突如として我が身を襲った痛みや衝撃に驚き、泣き叫んでいる風なものだった。だけど、だからこそそれは何よりも私に「生きている」と言う事を実感させてくれた。そして私は、その感動の余韻もさめやらぬ内に、穴の向こうから伸ばされてきた救急隊員らしき人の手に、しっかりと我が子を託した。

と、手から赤ちゃんが離れた、瞬間だった。脳髓が、さらにそこから背骨の中にある神経を通して、今ではあるのかどうかも分からないはずの足の先までの全身が、焼け焦げたかと思った。視界が意思に反してぐるぐると回り、さらに明暗も不安定になる。幾つもの音域のものが重なっているような耳鳴りが聞こえ、体中の筋肉がてんでに勝手な動きを取る。頭の前から爪先までをバイオリンに見立てて、神経繊維を束ねて弦にして、錆びたノコギリでそれを引かれているかのごとき激痛は、大量の血を失い、今すぐにも死んでおかしく無さそうな身にも容赦なく与えられた。喜悅も後悔も関係なく、狂い死に寸前の体にまともな思考を抱いていられる余裕など皆無に近かった。

けれど、それはゼロではなかった。一つだけ、私は確信していた。自分は今、きつと、笑っている。

まさしく狂人さながらの姿かも知れないけれど、だとすればこそ、それは誇れる死に様だと思つた。自分はちゃんと生きていたのだと、胸を張って良い姿だと確信した。

気を利かせてくれたのか、はたまた哀れんでくれたのか、それとも純粹に喜ばせようとしてくれたのか、穴の向こうに赤ちゃんが見えた。毛布にくるまれて、大きな目を見開いて、私の方を向いていた。

私は赤ちゃんを見つめ返していた。最後の最後までそうしていようと決めた。なぜなら私はまだ、生きている。まだ、見ていられる。まだ、笑っていられる。まだ、笑顔を見せてやれる。まだ、まだ、まだ――。